

ひかりの素足

宮沢賢治

青空文庫

一、山小屋

鳥の声があんまりやかましいので一郎は眼をさました。

もうすっかり夜があけてゐたのです。

小屋の隅から三本の青い日光の棒が斜めにまつすぐに兄弟の頭の上を越して向ふの萱の壁の山刀やはむばきを照らしてゐました。

土間のまん中では櫓が赤く燃えてゐました。日光の棒もそのけむりのために青く見え、またそのけむりはいろいろなかたちになつてついついとその光の棒の中を通つて行くのでした。

「ほう、すっかり夜あ明げだ。」一郎はひとりごとを云ひながら弟の櫓夫の方に向き直りました。櫓夫の顔はりんごのやうに赤く口をすこしあいてまだすやすや睡つて居ました。白い歯が少しばかり見えてゐましたので一郎はいきなり指でカチンとその歯をはじきました。

櫓夫は目をつぶつたまゝ一寸顔をしかめました。一寸顔をしかめたがまたすうすう息をしてねむりました。

「起ぎろ、櫛夫、夜あ明けだ、起ぎろ。」一郎は云ひながら櫛夫の頭をぐらぐらゆすぶりました。

櫛夫はいやさうに顔をしかめて何かぶつぶつ云つてゐましたがたうとううすく眼を開きました。そしていかにもびつくりしたらしく

「ほ、山さ来てらたもな。」とつぶやきました。

「昨夜、今朝方だたがな、火あ消でらたな、覚だが。」

一郎が云ひました。

「知らない。」

「寒くてさ。お父さん起きて又燃やしたやうだっけあ。」

櫛夫は返事しないで何かぼんやりほかのことを考えてゐるやうでした。

「お父さん外で稼いでら。さ、起ぎべ。」

「うん。」

そこで二人は一所いっしょにくるまつて寝た小さな一枚の布団から起き出しました。そして火のそばに行きました。櫛夫はけむさうにめをこすり一郎はじつと火を見てゐたのです。

外では谷川がごうごうと流れ鳥がツンツン鳴きました。

その時にはかにまぶしい黄金きんの日光が一郎の足もとに流れて来ました。

顔をあげて見ますと入口がパツとあいて向ふの山の雪がつんつんと白くかゞやきお父さんがまつ黒に見えながら入つて来たのでした。

「起きだのが。昨夜ゆべな寒くないがったが。」

「いゝえ。」

「火あ消けでらたもな。おれあ二度起きで燃やした。さあ、口漱すすげ、飯までげでら、櫛夫。」

「うん。」

「家ど山どどつちあ好いい。」

「山の方あい、いんとも学校さ行がれないもな。」

するとお父さんが鍋なべを少しあげながら笑ひました。一郎は立ちあがって外に出ました。

櫛夫もつづいて出ました。

何といふきれいでせう。空がまるで青びかりでツルツルしてその光はツンツンと二人の眼にしみ込みまた太陽を見ますとそれは大きな空の宝石のやうに橙だいだいや緑やかゞやきの粉をちらしまぶしさに眼をつむりますと今度はその蒼あをくろ黒いくらやみの中に青あをと光って見えるのです、あたらしく眼をひらいては前の青ぞらに桔ききやう梗いろや黄金きんやたくさんの太陽

のかげぼふしがくらくらとゆれてかゝつてゐます。

一郎はかけひの水を手にうけました。かけひからはつららが太い柱になって下までとゞき、水はすきとほつて日にかゞやきまたゆげをたてていかにも暖かさうに見えるのでしたがまことはつめたく寒いのでした。一郎はすばやく口をそゞぎそれから顔もあらひました。それからあんまり手がつめたいのでお日さまの方へ延ばしました。それでも暖まりませんでしたからのどにあてました。

その時なつを櫓夫も一郎のとほりまねをしてやつてゐましたが、たうとうつめたくてやめてしまひました。まったく櫓夫の手は霜やけで赤くふくれてゐました。一郎はいきなり走つて行つて

「冷つめだあが。」と云ひながらそのぬれた小さな赤い手を両手で包んで暖めてやりました。

さうして二人は又小屋の中にはひりました。

お父さんは火を見ながらじつと何か考へ、鍋はことごと鳴つてゐました。

二人も座りました。

日はもうよほど高く三本の青い日光の棒もだいぶ急になりました。

向ふの山の雪は青ぞらにくつきりと浮きあがり見てゐますと何だかこゝろが遠くの方へ

行くやうでした。

にはかにそのいたゞきにパツとけむりか霧のやうな白いぼんやりしたものがあらはれました。

それからしばらくたつてフイーとするどい笛のやうな声が聞えて来ました。

すると櫓夫がしばらく口をゆがめて変な顔をしてゐましたがたうとうどうしたわけかしくしく泣きはじめました。一郎も変な顔をして櫓夫を見ました。

お父さんがそこで

「何した、家さ行くだぐなつたのが、何した。」とたづねましたが櫓夫は両手を顔にあてて返事もしないで却^{かへ}つてひどく泣くばかりでした。

「何した、櫓夫、腹痛いが。」一郎もたづねましたがやっぱり泣くばかりでした。

お父さんは立つて櫓夫の額に手をあてて見てそれからすっかり頭を押へました。

するとだんだん泣きやんでつひにはたゞしくしく泣きじやくるだけになりました。

「何^なして泣いだ。家さ行くだぐなつたべあな。」お父さんが云ひました。

「うんにや。」櫓夫は泣きじやくりながら頭をふりました。

「ど^どこが痛くてが。」

「うんにや。」

「そだらなして泣いだりや、男などあ泣がないだな。」

「怖おつかない。」まだ泣きながらやつと答へるのでした。

「なして怖つかない。お父さんも居るし兄あなも居るし昼まで明りくて何なつても怖つかない
ことあ無いぢやい。」

「うんう、怖つかない。」

「何あ怖つかない。」

「風の又三郎あ云ったか。」

「何て云った。風の又三郎など、怖つかなくない。何て云った。」

「お父さんおりやさ新らしきもの着せるつて云ったか。」櫓夫はまた泣きました。一郎も
なぜかぞつとしました。けれどもお父さんは笑ひました。

「ああははは、風の又三郎あ、いゝ事こと云ったな。四月になったら新らし着物買ってけらな。
一向泣ぐことあないぢやい。泣ぐな泣ぐな。」

「泣ぐな。」一郎も横からのぞき込んでなぐさめました。

「もつと云ったか。」櫓夫なはまるで眼をこすつてまっかにして云ひました。

「何て云った。」

「それがらお母さん、おりやのごと湯さ入れで洗ふて云ったか。」

「ああはは、そいづあ嘘ぞ。榎夫などあいつつも一人して湯さ入るもな。風の又三郎などあ偽こぎさ。泣ぐな、泣ぐな。」

お父さんは何だか顔色を青くしてそれに無理に笑つてゐるやうでした。一郎もなぜか胸がつまつて笑へませんでした。榎夫はまだ泣きやみませんでした。

「さあお飯食べし泣ぐな。」

榎夫は眼をこすりながら変に赤く小さくなつた眼で一郎を見ながら又言ひました。

「それがらみんなしておりやのごと送つて行ぐて云ったか。」

「みんなして汝のごと送てぐど。そいづあなあ、うな立派になつてどごさが行く時あみんなして送つてぐづごとさ。みんないゝごとばがりだ。泣ぐな。な、泣ぐな。春になつたら盛岡祭見さ連でぐはんで泣ぐな。な。」

一郎はまつ青になつてだまつて日光に照らされたたき火を見てもましたが、この時やつと云ひました。

「なあに風の又三郎など、怖つかなくない。いっつも何だりかだりつて人だますぢやい。」

櫓夫もやうやく泣きじやくるだけになりました。けむりの中で泣いて眼をこすつたもんですから眼のまはりが黒くなってちよつと小さな狸たぬきのやうに見えました。

お父さんはなんだか少し泣くやうに笑つて

「さあもう一ひとがへり面洗つらないやない。」と云ひながら立ちあがりました。

二、峠

ひるすぎになつて谷川の音もだいぶかはりました。何だかあたたかくそしてどこかおだやかに聞えるのでした。

お父さんは小屋の入口で馬を引いて炭をおろしに来た人と話してゐました。ずるぶん永いこと話してゐました。それからその人は炭俵を馬につけはじめました。二人は入口に出て見ました。

馬はもりもりかひばをたべてそのたてがみは茶色でばさばさしその眼は大きくて眼の中にはさまざまのをかした器械が見えて大へんに気の毒に思はれました。

お父さんが二人に言ひました。

「そいであうなだ、この人さ随いで家さ戻れ。この人あ櫛ならはな鼻まで行がはんで。今度の土曜日に天気あ好がったら又おれあ迎いに行がはんでない。」

あしたは月曜日ですから二人とも学校へ出るために家へ帰らなければならぬのでした。
「そだら行がんです。」一郎が云ひました。

「うん、それがら家さ戻ったらお母つかさんさ、ついでの人さたのんで大きな方の鋸のこぎりをよごして呉けろつて云へやいな、いゝが。忘れなよ。家まで丁度一時半かゞらはんでゆつくり行つても三時間半にあ戻れる。のどあ乾いでも雪たべなやい。」

「うん。」櫛ならを夫が答へました。櫛夫はもうすっかり機嫌きげんを直してピョンピョン跳んだりしてゐました。

馬をひいた人は炭俵をすっかり馬につけてつなを馬のせなかで結んでから

「さ、そいでい、行ぐまちや。わらし達あ先に立つたら好いがべがな。」と二人のお父さんにたづねました。

「なあに随ついでで行ぐごたんす。どうがお願い申さんすぢや。」お父さんは笑つておじぎをしました。

「さ、そいであ、まんつ、」その人は牽ひきつなを持つてあるき出し鈴はツアリンツアリンと

鳴り馬は首を垂れてゆつくりあるきました。

一郎は檐夫をさきに立ててそのあとに跡ついて行きました。みちがよくなかたまつてじつさい気持ちがよく、空はまっ青にはれて、却かへつて少しこはいくらゐでした。

「房下がつてるぢやい。」にはかに檐夫が叫びました。一郎はうしろからよく聞えなかつたので「何や。」とたづねました。

「あの木さ房下がつてるぢやい。」檐夫が又云ひました。見るとすぐ崖がけの下から一本の木が立つてゐてその枝には茶いろの実がいっぱいに房になつて下つて居をりました。一郎はしばらくそれを見ました。それから少し馬におくれたので急いで追ひつきました。馬を引いた人はこの時ちよつとうしろをふりかへつてこつちをすかさやうにして見ましたがまた黙つてあるきだしました。

みちの雪はかたまつてはゐましたがでこぼこでしたから馬はたびたびつまづくやうにしました。檐夫もあたりを見てあるいてゐましたのでやはりたびたびつまづきさうにしました。

「下見で歩げ。」と一郎がたびたび云つたのでした。

みちはいつか谷川からはなれて大きな象のやうな形の丘の中腹をまはりはじめました。

栗くりの木が何本か立つて枯れた乾いた葉をいっぱい着け、鳥がちよんちよんと鳴いてうしろの方へ飛んで行きました。そして日の光がなんだか少しうすくなり雪がそのままより暗くそして却って強く光って来ました。

そのとき向ふから一列の馬が鈴をチリンチリンと鳴らしてやって参りました。

みちがひと一むらの赤い実をつけたまゆみの木のそばまで来たとき両方の人たちは行きあひました。兄弟の先に立った馬は一寸ちよつとみちをよけて雪の中に立ちました。兄弟も膝ひざまで雪にはひつてみちをよけました。

「早いな。」

「早がったな。」あいさつ挨拶をしながら向ふの人たちや馬は通り過ぎて行きました。

ところが一ばんおしまひの人は挨拶をしたなり立ちどまってしまひました。馬はひとりで少し歩いて行ってからうしろから「どう。」と云はれたのでとまりました。兄弟は雪中からみちにあがり二人とならんで立つてゐた馬もみちにあがりました。ところが馬を引いた人たちはいろいろ話をはじめました。

兄弟はしばらくは、立つて自分たちの方の馬の歩き出すのを待つてゐましたがあまり待ち遠しかつたのでたうとう少しづつあるき出しました。あとはもう峠を一つ越えればすぐ

家でしたし、一里もないのでしたからそれに天気も少しは曇ったってみちはまっすぐについでゐるのでしたから何でもないと一郎も思ひました。

馬をひいた人は兄弟が先に歩いて行くのを一寸ちよつとよこめで見てゐましたがすぐあとから追ひつくつもりらしくだまって話をつゞけました。

櫓夫はもう早くうちへ帰りたいらしくどんどん歩き出し一郎もたびたびうしろをふりかへつて見ましたが馬が雪の中で茶いろの首を垂れ二人の人が話し合つて白い大きな手甲がちらつと見えたりするだけでしたからやつぱり歩いて行きました。

みちはだんだんのぼりになりつひにはすっかり坂になりましたので櫓夫はたびたびひざ膝に手をつつぱつて「うんうん」とふぎけるやうにしながらのぼりました。一郎もそのうしろからはあはあ息をついて

「よう、坂道、よう、山道」なんて云ひながら進んで行きました。

けれどもたうとう櫓夫は、つかれてくるりとこつちを向いて立ちどまりましたので、一郎はいきなりひどくぶつつかりました。

「こは疲いが。」一郎もあはあしながら云ひました。来た方を見ると路はみち一すぢずうつと細くついて人も馬ももう丘のかげになつて見えませんでした。いちめんまっ白な雪、（それ

は大へんくらく沈んで見えませんでした。空がすっかり白い雲でふさがり太陽も大きな銀の盤のやうにくもつて光つてゐたのです。がなだらかに起伏しそのところどころに茶いろの栗くりや柏かしはの木が三本四本づつちらばつてゐるだけじつにしいんとして何ともいへないさびしいのでした。けれども檐夫はその丘の自分たちの頭の上からまっすぐに向ふへかけおりて行く一疋びきの鷹たかを見たとき高く叫びました。

「しつ、鳥だ。しゅう。」

一郎はだまつてゐました。けれどももしばらく考えてから云ひました。

「早ぐ峠越えるべ。雪降つて来るぢよ。」

ところが丁度そのときです。まっしろに光つてゐる白いそらに暗くゆるやかにつらなつてゐた峠の頂の方が少しぼんやり見えて来ました。そしてまもなく小さな小さな乾いた雪のこなが少しばかりちらつちらつと二人の上から落ちて参りました。

「さあ檐夫、早ぐのぼれ、雪降つて来た。上さ行げば平らだはんて。」一郎が心配さうに云ひました。

檐夫は兄の少し変わった声を聞いてにはかにあわてました。そしてまるでせかせかとのぼりました。

「あんまり急ぐな。大丈夫だはんで、なあにあど一里も無いも。」一郎も息をはづませながら云ひました。けれどもじつさい二人とも急がずに居られなかつたのです。めの前もくらむやうに急ぎました。あんまり急ぎすぎたのでそれはながくつゞきませんでした。雪がまったくひどくなつて来た方も行く方もまるで見えぬ二人のからだもまつ白になりました。そしてなを榎夫が泣いていきなり一郎にしがみつきました。

「戻るが、榎夫。戻るが。」一郎も困つてさう云ひながら来た下の方を一寸ちよつと見ましたがとてももう戻ろうとは思はれませんでした。それは来た方がまるで灰いろで穴のやうにくらく見えたのです。それにくらはべては峠の方は白く明るくおまけに坂の頂上だつてもうぢきでした。そこまでさへ行けばあとはもう十町もずうつと丘の上で平らでしたし来るときは山鳥も何べんも飛び立ちくわんぼく灌木の赤や黄いろの実もあつたのです。

「さあもう一あしだ。歩あべ。上まで行けば雪も降つてないしみぢも平らになる。歩べ、怖おつかなぐないはんで歩べ。あどがらあの人も馬ひで来るしそれ、泣がないで、今度あゆつくり歩べ。」一郎は榎夫の顔をのぞき込んで云ひました。榎夫は涙をふいてわらひました。榎夫の頬ほほに雪のかけらが白くついてすぐ溶けてなくなつたのを一郎はなんだか胸がせまるやうに思ひました。一郎が今度は先に立つてのぼりました。みちももうそんなにけはしく

はありませんでしたし雪もすこし薄くなつたやうでした。それでも二人の雪ゆきぐつ沓は早くも一寸も埋まりました。

だんだんいたゞきに近くなりますと雪をかぶつた黒いゴリゴリの岩がたびたびみちの両がはに出て来ました。

二人はだまつてなるべく落ち着くやうにして一足づつのぼりました。一郎はばたばた毛布をうごかしてからだから雪をはらつたりしました。

そしていゝことはもうそこが峠のいたゞきでした。

「来た来た。さあ、あどあ平らだぞ、榎夫。」

一郎はふりかへつて見ました。榎夫は顔をまつかにしていはあはあしながらやつと安心したやうにわらひました。けれども二人の間にもこまかな雪がいつぱいに降つてゐました。

「馬もきつと坂半分ぐらゐ登つたな。叫んで見べが。」

「うん。」

「いゝが、一二三、ほおお。」

声がしんと空へ消えてしまひました。返事もなくこだまも来ずかへつてそらが暗くなつて雪がどんどん舞ひおりのばかりです。

「さあ、歩^あべ。あと三十分で下りるにいい。」

一郎はまたあるきだしました。

にはかに空のほうでヒイウと鳴って風が来ました。雪はまるで粉のやうにけむりのやうに舞ひあがりくるしくて息もつかれずきものすきまからはひやひやとからだにはひりましました。兄弟は両手を顔にあてて立ちどまつてゐましたがやつと風がすぎたので又あるき出さうとするときこんどは前より一そうひどく風がやつて来ました。その音はおそろしい笛のやう、二人のからだも曲げられ足もとをさらさら雪の横にながれるのさへわかりました。たうげのいたゞきはまったくさつき考へたのとはちがつてゐたのです。櫓夫はあんまりこゝろぼそくなつて一郎にすがらうとしました。またうしろをふりかへつても見ました。けれども一郎は風がやむとすぐ歩き出しましたし、うしろはまるで暗く見えましたから櫓夫はほんたうに声を立てないで泣くばかりよりちよち兄に追ひ付いて進んだのです。

雪がもう沓^{くつ}のかゝと一杯でした。ところどころには吹き溜^{だま}りが出来てやつとあるけるぐらゐでした。それでも一郎はずんずん進みました。櫓夫もそのあしあとを一生けん命ついで行きました。一郎はたびたびうしろをふりかへつてはゐましたがそれでも櫓夫はおくれがちでした。風がひゆうと鳴って雪がぱつとつめたいけむりをあげますと、一郎は少し立

ちどまるやうにし櫓夫は小刻みに走つて兄に追ひすがりました。

けれどもまだその峯みちを半分も来ては居りませんでした。吹きだまりがひどく大きくなつてたびたび二人はつまづきました。

一郎は一つの吹きだまりを越えるとき、思ったより雪が深くてたうとう足をさらはれて倒れました。一郎はからだや手やすっかり雪になつて軋きしるやうに笑つて起きあがりました。櫓夫はうしろに立つてそれを見てこはさに泣きました。

「大丈夫だ。櫓夫、泣くな。」一郎は云ひながら又あるきました。けれどもこんどは櫓夫がころびました。そして深く雪の中に手を入れてしまつて急に起きあがりもできずおじぎのときのやうに頭をさげてそのまゝ泣いてゐたのです。一郎はすぐ走り戻つて起き起しました。そしてその手の雪をはらつてやりそれから、

「さあも少しだ。歩げるが。」とたづねました。

「うん」と櫓夫は云つてゐましたがその眼はなみだで一杯になりじつと向ふの方を見、口はゆがんで居りました。

雪がどンドン落ちて来ます。それに風が一そうはげしくなりました。二人は又走り出しましたけれどももうつまづくばかり一郎がころび櫓夫がころびそれにいまはもう二人とも

みちをあるいてるのかどうか前無かった黒い大きな岩がいきなり横の方に見えたりしました。

風がまたやって来ました。雪は塵ちりのやう砂のやうけむりのやう檜夫はひどくせき込んでしまひました。

そこはもうみちではなかつたのです。二人は大きな黒い岩につきあたりました。

一郎はふりかへつて見ました。二人の通つて来たあととはまるで雪の中にほりのやうに歩いてゐました。

「路まちがった。戻らないばわがない。」

一郎は云つていきなり檜夫の手をとつて走り出さうとしましたがもうたゞの一足ですぐ雪の中に倒れてしまひました。

檜夫はひどく泣きだしました。

「泣ぐな。雪はれるうち此処ここに居るべし泣ぐな。」一郎はしっかりと檜夫を抱いて岩の下に立つて云ひました。

風がもうまるできちがひのやうに吹いて来ました。いきもつけず二人はどんだん雪をかぶりました。

「わがない。わがない。」櫓夫が泣いて云ひました。その声もまるでちぎるやうに風が持つて行つてしまひました。一郎は毛布をひろげてマントのまゝ櫓夫なをを抱きしめました。

一郎はこのときはもうほんたうに二人とも雪と風で死んでしまふのだと考えてしまひました。いろいろなことがまるでまはり燈籠とうろうのやうに見えて来ました。正月に二人は本家ほんけに呼ばれて行つてみんながみかんをたべたとき櫓夫がすばやく一つたべてしまつても一つを取つたので一郎はいけないといふやうにひどく目で叱しかつたのでした、そのときの櫓夫の霜やけの小さな赤い手などがはつきり一郎に見えて来ました。いきが苦しくてまるでええらする毒をのんでゐるやうでした。一郎はいつか雪の中に座つてしまつてゐました。そして一そう強く櫓夫を抱きしめました。

三、うすあかりの国

けれどもけれどもそんなことはまるでまるで夢のやうでした。いつかつめた針のやうな雪のこなもなんだかなまぬるくなり櫓夫もそばに居なくなつて一郎はたゞひとりぼんやりやぶくらしい藪のやうなところをあるいて居りました。

そこは黄色にぼやけて夜だか昼だか夕方かもわからずよもぎのやうなものがいつぱいに生えあちこちには黒いやぶらしいものがまるでいきものやうにいきをしてゐるやうに思はれました。

一郎は自分のからだを見ました。そんなことが前からあつたのか、いつかからだには鼠ねずみいろのきれが一枚まきついてあるばかりおどろいて足を見ますと足ははだしになつてゐて今までもよほど歩いて来たらしく深い傷がついて血がだらだら流れて居りました。それに胸や腹がひどく疲れて今にもからだが二つに折れさうに思はれました。一郎にはかにはなくなつて大声に泣きました。

けれどもそこはこの国だつたのでせう。ひっそりとして返事もなく空さへもなんだかがらんとして見れば見るほど変なおそろしい気がするのです。それにはかに足あしが灼やくやうに傷いたんで来ました。

「櫓夫は。」ふつと一郎は思ひ出しました。

「櫓夫お。」一郎はくらい黄色なそらに向つて泣きながら叫びました。

しいんとして何の返事もありませんでした。一郎はたまらなくなつてもう足の痛いのも忘れてはしり出しました。すると俄にはかに風が起つて一郎のからだについてゐた布はまつす

ぐにうしろの方へなびき、一郎はその自分の泣きながらはだしで走って行ってぼろぼろの布が風でうしろへなびいてゐる景色を頭の中に考へて一そう恐ろしくかなしくてたまらなくなりました。

「榎夫お。」一郎は又叫びました。

「兄^あな。」かすかなかすかな声が遠くの遠くから聞えました。一郎はそつちへかけ出しました。そして泣きながら何べんも「榎夫お、榎夫お。」と叫びました。返事はかすかに聞えたり又返事したのかどうか聞えなかつたりしました。

一郎の足はまるでまっ赤になつてしまひました。そしてもう痛いかどうかもわからず血は気味悪く青く光つたのです。

一郎ははしつてはしつて走りました。

そして向ふに一人の子供が丁度風で消えようとする蠟^{ろうそく}燭の火のやうに光つたり又消えたりペかペかしてゐるのを見ました。

それが顔に両手をあてて泣いてゐる榎夫^{なを}でした。一郎はそばへかけよりました。そしてにはかに足がぐらぐらして倒れました。それから力いっぱい起きあがつて榎夫を抱かうとしました。榎夫は消えたりともつたりしきりにしてゐましたがだんだんそれが早くなりました。

うとうその変りもわからないやうになつて一郎はしつかりと檐夫を抱いてゐました。

「檐夫、僕たちどこへ来たらうね。」一郎はまるで夢の中のやうに泣いて檐夫の頭をなでてやりながら云ひました。その声も自分が云つてゐるのか誰かの声を夢で聞いてゐるのかわからないやうでした。

「死んだんだ。」と檐夫は云つてまたはげしく泣きました。

一郎は檐夫の足を見ました。やつぱりはだしでひどく傷がついて居りました。

「泣かなくつてもいゝんだよ。」一郎は云ひながらあたりを見ました。ずうつと向ふにぼんやりした白びかりが見えるばかりしいんとしてなんにも聞えませんでした。

「あすこの明るいところまで行つて見よう。きつとうちがあるから、お前あるけるかい。」

一郎が云ひました。

「うん。おっかさんがそこに居るだろうか。」

「居るとも。きつと居る。行かう。」

一郎はさきになつてあるきました。そらが黄いろでぼんやりくらくていまにもそこから長い手が出て来さうでした。

足がたまらなく痛みました。

「早くあすこまで行かう。あすこまでさへ行けばいゝんだから。」一郎は自分の足があまり痛くてバリバリ白く燃えてるやうなのをこらへて云ひました。けれども榎夫はもうとてもたまらないらしく泣いて地面に倒れてしまひました。

「さあ、兄さんにしつかりつかまるんだよ。走って行くから。」一郎は齒を喰ひしばつて痛みをこらへながら榎夫を肩にかけました。そして向ふのぼんやりした白光をめがけてまるでからだもちぎれるばかり痛いのを堪へて走りまゐりました。それでももうとてもたまらなくなつて何べんも倒れました。倒れてもまた一生懸命に起きあがりまゐりました。

ふと振りかへつて見ますと来た方はいつかぼんやり灰色の霧のやうなものにかくれてその向ふを何かうす赤いやうなものがひらひらしながら一目散に走つて行くらしいのです。

一郎はあんまりの怖さに息もつまるやうにおもひました。それでもこらへてむりに立ちあがつてまた榎夫を肩にかけました。榎夫はぐつたりとして気を失つてゐるやうでした。一郎は泣きながらその耳もとで、

「榎夫、しつかりおし、榎夫、兄さんがわからないかい。榎夫。」と一生けん命呼びました。

榎夫はかすかにかすかに眼をひらくやうにはしましたけれどもその眼には黒い色も見え

なかつたのです。一郎はもうあらんかぎりの力を出してそこから中いちめんちらちらちら白い火になって燃えるやうに思ひながら櫓夫を肩にしてさっきめぎした方へ走りまゐりました。足がうごいてゐるかどうかもわからずからだは何か重い巖いはに碎かれて青びかりの粉になつてちらけるやう何べんも何べんも倒れては又櫓夫を抱き起して泣きながらしつかりとかゝへ夢のやうに又走り出したのでした。それでもいつか一郎ははじめにめぎしたうすあかるい処ところに来ては居ました。けれどもそこは決していゝ処ではありませんでした。却かへつて一郎はからだ中凍つたやうに立ちすくんでしまひました。すぐ眼の前は谷のやうになつた窪地くぼちでしたがその中を左から右の方へ何ともいへずいたましいなりをした子供らがぞろぞろ追はれて行くのでした。わづかばかりの灰いろのきれをからだにつけた子もあれば小さなマントばかりはだかに着た子もありました。瘡やせて青ぎめて眼ばかり大きな子、髪あかの赭あかい小さな子、骨の立つた小さな膝ひざを曲げるやうにして走つて行く子、みんなからだを前にまげておどおど何かを恐れ横を見るひまもなくたゞふかくふかくため息をついたり声を立てないで泣いたり、ぞろぞろ追はれるやうに走つて行くのでした。みんな一郎のやうに足あしが傷きずいてゐたのです。そして本たうに恐ろしいことはその子供らの間を顔のまっ赤な大きな人のかたちのものが灰いろの棘とげのぎざぎざ生えた鎧よろひを着て、髪などはまるで火が燃えてゐる

やう、たゞれたやうな赤い眼をして太い鞭むちを振りながら歩いて行くのでした。その足が地面にあたる時は地面はがりがり鳴りました。一郎はもう恐ろしさに声も出ませんでした。榎夫ぐらゐの髪の毛のちゞれた子が列の中に居ましたがあんまり足が痛むと見えてたうとうよろよろつまづきました。そして倒れさうになつて思はず泣いて

「痛いよう。おつかさん。」と叫んだやうでした。するとすぐ前を歩いて行つたあの恐ろしいものは立ちどまつてこつちを振り向きました。その子はよろよろして恐ろしさに手をあげながらうしろへ遁にげようとなりましたたちま。忽ちその恐ろしいものの口がぴくつとうごきばつと鞭が鳴つてその子は声もなく倒れてもだえました。あとから来た子供らはそれを見てもたゞふらふらと避けて行くだけ一語も云ふものがありませんでした。倒れた子はしばらくもだえてゐましたがそれでもいつかさっきの足の痛みなどは忘れたやうに又よろよろと立ちあがるのでした。

一郎はもう行くにも戻るにも立ちすくんでしまひました。俄にはかに榎夫が眼を開いて

「お父さん。」と高く叫んで泣き出しました。すると丁度下を通りかかった一人のその恐ろしいものはそのゆがんだ赤い眼をこつちに向けました。一郎は息もつまるやうに思ひました。恐ろしいものはむちをあげて下から叫びました。

「そこらで何をしてるんだ。下りて来い。」

一郎はまるでその赤い眼に吸ひ込まれるやうな気がしてよろよろ二三歩そっちへ行きましたがやつとふみとまってしつかり榎夫を抱きました。その恐ろしいものは頬をびくびく動かし歯をむき出して咆えるやうに叫んで一郎の方に登って来ました。そしていつか一郎と榎夫とはつかまれて列の中に入つてゐたのです。ことに一郎のかなしかつたことはどうしたのか榎夫が歩けるやうになつてはだしでその痛い地面をふんで一郎の前をよろよろ歩いてゐることでした。一郎はみんなと一緒には追はれてあるきながら何べんも榎夫の名を低く呼びました。けれども榎夫はもう一郎のことなどは忘れたやうでした。たゞたびたびおびえるやうにうしろに手をあげながら足の痛さによるめきながら一生けん命歩いてゐるのでした。一郎はこの時はじめて自分たちを追つてゐるものは鬼といふものなことを、又榎夫などに何の悪いことがあつてこんなつらい目にあふのかといふことを考へました。そのとき榎夫がたうとう一つの赤い稜のある石につまづいて倒れました。鬼のむちがその小さなからだを切るやうに落ちました。一郎はぐるぐるしながらその鬼の手にすがりました。

「私を代りに打つて下さい。榎夫はなんにも悪いことがないのです。」

鬼はぎよつとしたやうに一郎を見てそれから口がしばらくびくびくしてゐましたが大き

な声で斯う云ひました。その齒がギラギラ光つたのです。

「罪はこんどばかりではないぞ。歩け。」

一郎はせなかがシインとしてまはりがくるくる青く見えました。それからからだ中からつめたい汗が湧きました。

こんなにして兄弟は追はれて行きました。けれどもだんだん来たと見えて二人ともなんだか少し楽になつたやうにも思ひました。ほかの人たちの傷ついた足や倒れるからだを夢のやうに横の方に見たのです。にはかにあたりがぼんやりくらくらくなりました。それから黒くなりました。追はれて行く子供らの青じろい列ばかりその中に浮いて見えました。

だんだん眼が闇になれて来た時一郎はその中のひろい野原にたくさんの黒いものがじつと座つてゐるのを見ました。微かな青びかりもありました。それらはみなからだ中黒い長い髪の毛で一杯に覆はれてまっ白な手足が少し見えるばかりでした。その中の一つがどういふわけか一寸動いたと思ひますと俄かにはえまはりました。そしてまもなくその声もなくなつて一かけの泥のかたまりのやうになつてころがるのを見ました。そしてだんだん眼がなれて来たときその闇の中のいきものは刀の刃のやうに鋭い髪の毛でからだを覆はれてゐること一寸でも動けばすぐからだを切るこ

とがわかりました。

その中をしばらくしばらく行つてからまたあたりが少し明るくなりました。そして地面はまっ赤でした。前の方の子供らが突然烈しく泣いて叫びました。列もとまりました。鞭むちの音や鬼の怒り声が雹ひょうや雷のやうに聞えて来ました。一郎のすぐ前を櫓夫がよろよろしてゐるのです。まったく野原のその辺は小さな瑪瑙めなうのかけらのやうなものでできてゐて行くものの足を切るのです。

鬼は大きな鉄の沓くつをはいてゐました。その歩きたびに瑪瑙はガリガリ碎けたのです。一郎のまはりからも叫び声が沢山起りました。櫓夫も泣きました。

「私たちはどこへ行くんですか。どうしてこんなつらい目にあふんですか。」櫓夫はとなりの子にたづねました。

「あたしは知らない。痛い。痛いなあ。おつかさん。」その子はぐらぐら頭をふつて泣き出しました。

「何を云つてるんだ。みんなきさまたちの出かしたこつた。どこへ行くあてもあるもんか。」

うしろで鬼が咆ほえて又鞭をならししました。

野はらの草はだんだん荒くだんだん鋭くなりました。前の方の子供らは何べんも倒れては又力なく起きあがり足もからだも傷つき、叫び声や鞭むちの音はもうそれだけでも倒れさうだったのです。

櫓夫がいきなり思ひ出したやうに一郎にすがりついて泣きました。

「歩け。」鬼が叫びました。鞭が櫓夫を抱いた一郎の腕をうちました。一郎の腕はしびれてわからなくなつてただびくびくうごきました。櫓夫がまだすがりついてゐたので鬼が又鞭をあげました。

「櫓夫は許して下さい。櫓夫は許して下さい。」一郎は泣いて叫びました。

「歩け。」鞭が又鳴りましたので一郎は両腕であらん限り櫓夫をかばひました。かばひながら一郎はどこからか

「によらいじゆりやうぼん第十六。」といふやうな語ことばがかすかな風のやうに又匂にほひのやうに一郎に感じました。すると何だかまはりがほつと楽になつたやうに思つて

「によらいじゆりやうぼん。」と繰り返してつぶやいてみました。すると前の方を行く鬼が立ちどまって不思議さうに一郎をふりかへつて見ました。列もとまりました。どう云ふわけか鞭の音も叫び声もやみました。しいんとなつてしまつたのです。気がついて見ると

そのうすくらしい赤い瑪瑙めなうの野原のはづれがぼうつと黄金きんいろになってその中を立派な大きな人がまっすぐにこつちへ歩いて来るのでした。どう云ふわけかみんなはほっとしたやうに思ったのです。

四、光のすあし

その人の足は白く光って見えませんでした。実にはやく実にまっすぐにこつちへ歩いて来るのでした。まっ白な足さきが二度ばかり光りもうその人は一郎の近くへ来てゐました。

一郎はまぶしいやうな気がして顔をあげられませんでした。その人ははだしでした。まるで貝殻のやうに白くひかる大きなすあしでした。くびすのところの肉はかゞやいて地面まで垂れてゐました。大きなまっ白なすあしだったので。けれどもその柔らかなすあしは鋭い鋭い瑪瑙めなうのかげらをふみ燃えあがる赤い火をふんで少しも傷つかず又灼やけませんでした。地面の棘とげさへ又折れませんでした。

「こはいことはないぞ。」微かすかに微かにわらひながらその人はみんなに云ひました。その大きな瞳ひとみは青い蓮はすのはなびらのやうにりとみんなを見ました。みんなはどう云ふわけと

もなく一度に手を合わせました。

「こはいことはない。おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなもんだ。なんにもこはいことはない。」

いつの間にかみんなはその人のまはりに環わになつて集つて居りました。さつきまであんなに恐ろしく見えた鬼どもがいまはみなすなほにその大きな手を合せ首を低く垂れてみんなのうしろに立つてゐたのです。

その人はしづかにみんなを見まはしました。

「みんなひどく傷を受けてゐる。それはおまへたちが自分で自分を傷つけたのだぞ。けれどもそれも何でもない、」その人は大きなまつ白な手でなづ櫛夫の頭をなでました。櫛夫も一郎もその手のかすかにほほの花のにほひのするのを聞きました。そしてみんなのからだの傷はすっかり癒なほつてゐたのです。

一人の鬼がいきなり泣いてその人の前にひざまづきました。それから頭をけはしい瑪瑙の地面に垂れその光る足を一寸手ちよつとでいたゞきました。

その人は又微笑に笑ひました。すると大きな黄金きんいろの光が円い輪になつてその人の頭のまはりにかゝりました。その人は云ひました。

「こゝは地面が剣でできてゐる。お前たちはそれで足やからだをやぶる。さうお前たちは思つてゐる、けれどもこの地面はまるつきり平らなのだ。さあご覧。」

その人は少しかぐんでそのまっ白な手で地面に一つ輪をかきました。みんなは眼を擦つたのです。又耳を疑がつたのです。今までの赤い瑪瑙の棘ででき暗い火の舌を吐いてゐたかなしい地面が今は平らな平らな波一つ立たないまっ青な湖水の面に変りその湖水はどこまでつづくのかはては孔雀石の色に何条もの美しい縞になり、その上には蜃気楼のやうにそしてもつとはつきりと沢山の立派な木や建物がじつと浮んでゐたのです。それらの建物はずうつと遠くにあつたのですけれども見上げるばかりに高く青や白びかりの屋根を持つたり虹のやうないろの幡が垂れたり、一つの建物から一つの建物へ空中に真珠のやうに光る欄干のついた橋廊がかかつたり高い塔はたくさん鈴や飾り網を掛けそのさきの棒はまっすぐに高くそらに立ちました。それらの建物はしんとして音なくそびえその影は実にはつきりと水面に落ちたのです。

またたくさんの樹が立つてゐました。それは全く宝石細工としか思はれませんでした。はんの木のやうなかたちでまっ青な樹もありました。楊に似た木で白金のやうな小さな実になつてゐるのもありました。みんなその葉がチラチラ光つてゆすれ互いにぶつつかり合

つて微妙な音をたてるのでした。

それから空の方からはいろいろな楽器の音がさまざまのいろの光のこなと一所に微妙かに降ってくるのでした。もつともつと愕いたことはあんまり立派な人たちのそこにもこゝにも一杯なことでした。ある人人は鳥のやうに空中を翔けてみました。がその銀いろの飾りのひもはまっすぐにうしろに引いて波一つたないのでした。すべて夏の明方のやうないゝ匂で一杯でした。ところが一郎は俄かに自分たちも又そのまっ青な平らな平らな湖水の上に立つてゐることに気がつきました。けれどもそれは湖水だったのでせうか。いゝえ、水ぢやなかつたのです。硬かつたのです。冷たかつたのです、なめらかだつたのです。それは実に青い宝石の板でした。板ぢやない、やっぱり地面でした。あんまりそれがなめらかで光つてゐたので湖水のやうに見えたのです。

一郎はさつきの人を見ました。その人はさつきとは又まるで見ちがへるやうでした。立派な瓔珞をかけ黄金の円光を冠りかすかに笑つてみんなのうしろに立つてゐました。そこに見えるどの人よりも立派でした。金と紅宝石を組んだやうな美しい花皿を捧げて天人たちが一郎たちの頭の上をすぎ大きな碧や黄金のはなびらを落して行きました。

そのはなびらはしづかにしづかにそらを沈んでまゐりました。

さつきのうすくらい野原で一緒だった人たちはいまみな立派に変わってゐました。一郎は櫛夫を見ました。櫛夫がやはり黄金いろのきものを着、瓔珞も着けてゐたのです。それから自分を見ました。一郎の足の傷や何かはすっかりなほつていまはまっ白に光りその手はまばゆくいゝ匂だったのです。

みんなはしばらくたゞよろこびの声をあげるばかりでしたがそのうちに一人の子が云ひました。

「此処はまるでいゝんだなあ、向ふにあるのは博物館かしら。」

その巨きな光る人が微笑つて答へました。

「うむ。博物館もあるぞ。あらゆる世界のできごとがみんな集まつてゐる。」

そこで子供らは俄かにいろいろなことを尋ね出しました。一人が云ひました。

「こゝには図書館もあるの。僕アンデルゼンのおはなしやなんかもつと読みたいなあ。」
一人が云ひました。

「こゝの運動場なら何でも出来るなあ、ボールだつて投げたつてきつとどこまでも行くんだ。」

非常に小さな子は云ひました。

「僕はチョコレートがほしいなあ。」

その巨きな人はしづかに答へました。

「本はこゝにはいくらでもある。一冊の本の中に小さな本がたくさんはひつてゐるやうなものもある。小さな小さな形の本にあらゆる本のみな入つてゐるやうな本もある、お前たちはよく読むがいゝ。運動場もある、そこでかけることを習ふものは火の中でも行くことができる。チョコレートもある。こゝのチョコレートは大へんにいゝのだ。あげよう。」

その大きな人は一寸空ちよつとの方を見ました。一人の天人が黄いろな三角を組みたてた模様のついた立派な鉢を捧げてまつすぐに下りて参りました。そして青い地面に降りて度うやうやしくその大きな人の前にひざまづき鉢を捧げました。

「さあたべてごらん。」その大きな人は一つを櫛夫にやりながらみんなに云ひました。みんなはいつか一つづつその立派な菓子を持つてゐたのです。それは一寸嘗なめたときからだ中すうつと涼しくなりました。舌のさきで青い螢のやうな色や橙だいだいいろの火やらきれいな花の図案になつてチラチラ見えるのでした。たべてしまつたときからだがピンとなりました。しばらくたつてからだ中から何とも云へない匂いがぼうつと立つのでした。

「僕たちのお母さんはどつちに居るだらう。」櫛夫が俄にはかに思ひだしたやうに一郎にたづ

ねました。

するとその大きな人がこつちを振り向いてやさしく櫓夫の頭をなでながら云ひました。

「今にお前の前のお母さんを見せてあげよう。お前はもうこゝで学校に入らなければならぬ。それからお前はしばらく兄さんと別れなければならぬ。兄さんはもう一度お母さんの所へ帰るんだから。」

その人は一郎に云ひました。

「お前も一度あのもとの世界に帰るのだ。お前はすなほないゝ子供だ。よくあの棘とげの野原で弟を棄すてなかつた。あの時やぶれたお前の足はいまはもうはだしで悪い剣の林を行くことができるぞ。今の心持を決して離れるな。お前の国にはこゝから沢山の人が行くてゐる。よく探さがしてほんたうの道を習へ。」その人は一郎の頭を撫なでました。一郎はたゞ手を合せ眼を伏せて立つてゐたのです。それから一郎は空の方で力一杯に歌つてゐるいゝ声の歌を聞きました。その歌の声はだんだん変りすべての景色はぼうつと霧の中のやうに遠くなりました。たゞその霧の向ふに一本の木が白くかゞやいて立ち櫓夫がまるで光つて立派になつて立ちながら何か云ひたさうにかすかにわらつてこつちへ一寸手を延ばしたのです。

五、峠

「櫓夫」と一郎は叫んだと思ひましたら俄かに新しいまっ白なものを見ました。それは雪でした。それから青空がまばゆく一郎の上にかかつてゐるのを見ました。

「息吐だぞ。眼開いだぞ。」一郎のとなりの家の赤髯の人がすぐ一郎の頭のところに曲んでゐてしきりに一郎を起さうとしてゐたのです。そして一郎ははつきり眼を開きました。

櫓夫を堅く抱いて雪に埋まつてゐたのです。まばゆい青ぞらに村の人たちの顔や赤い毛布や黒の外ぐわいたう套あがくつきりと浮んで一郎を見下してゐるのです。

「弟あなぢよだ。弟あ。」犬の毛皮を着た獵師が高く叫びました。となりの人は櫓夫の腕をつかんで見ました。一郎も見ました。

「弟あわがないよだ。早ぐ火焚げ」となりの人が叫びました。

「火焚いでわがない。雪さ寝せろ。寝せろ。」

獵師が叫びました。一郎は扶けられて起されながらも一度櫓夫の顔を見ました。その顔は苹果のやうに赤くその唇はさつき光の国で一郎と別れたときのまゝ、かすかに笑つてゐ

たのです。けれどもその眼はとちその息は絶えそしてその手や胸は氷のやうに冷えてしま
つてゐたのです。

青空文庫情報

底本：「宮沢賢治全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年3月25日第1刷発行

1992（平成4）年3月10日第6刷発行

入力：あきら

校正：伊藤時也

2000年2月4日公開

2005年10月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひかりの素足

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>